

「おふでさき」ではある具体的な状況に関連づけて親神の思いが述べられている場合が多い。第百九首の「この者を四年以前に迎えとって、神が抱きしめているということが一つの証拠となる」の「この者」とは、『注釈』によれば、中山秀司の子供である「お秀」を指している。この歌に込められた神意をたずねるために、まず背景事情として秀司の結婚について記したい。

高野友治によれば、秀司の最初の結婚は井戸堂の医師土井宗仙の娘であった。天保10年(1839)か11年頃のことと推定される。しかし、その娘は夜な夜な教祖に下る天啓に恐れをなして、3日後には実家へ帰ってしまった。次に、庄屋敷の農家の娘でお秀の生母にあたる「やそ」という人と結婚している。ところが、やそもやがて姿を隠してしまい、嘉永6年(1853)生まれのお秀は教祖が大事に育てたといわれている。

その後、秀司は川原城の「おちえ」と内縁関係になり、安政5年(1858)に二人の間に「音次郎」が生まれ、その後「かの」が生まれた。ところが、この夫婦関係は教祖がお許しにならず、「おふでさき」第一号でも再三おちえを実家に帰すように促されている。やがて、おちえは実家に帰り、『注釈』によれば、その後数日して病に臥してそのまま亡くなった。

そして、明治2年(1869)、秀司が49歳のとき、神意に基づいて、大和国平群郡平等寺村の小東まつえ(19歳)を正妻に迎えた。このとき秀司には17歳のお秀がいたが、翌年の明治3年(1870)の3月15日に18歳で亡くなった。そして、明治8年(1875)にまつえが妊娠したとき、「おふでさき」で、「この事の始めから話すなら、六年以前に遡り、三月十五日に迎えとった子供である」(7号67)と詠って、明治3年に亡くなったお秀が生まれ変わってくることを述べられたが、このときの妊娠は流産となり、その後もう一度妊娠して、明治10年2月5日に「たまへ」として生まれたのである。

さて、これらを踏まえて、第百九首前後の歌をみてみよう。「神の心というものは、だんだんと不思議を現してたすけを急いでいる」(三号104)、「この不思議をなんの事だと思っているのか、埃を払って掃除することだ」(三号105)、「そのあと早く柱を入れたことなら、これでこの世の定まりがつく」(三号106)、「この話が早く目に見えて実現してきたなら、どんなものでも神の言葉を納得せよ」(三号107)と、人々の心を澄まして「柱」(かんろだい、真柱)を据えたい旨を述べて、続けて「今まではかんろだいを据えることで陽気ぐらしができるという神の言葉を実証すると言っているが、人間にしてみればかんろだいは一体何のことかと思っているだろう」(三号108)と人間の心境を慮っている。

明治6年に、教祖は飯降伊蔵に命じて「かんろだい」の雛型を作らせたが、それが据えられるべき場所(「ぢば」)が定められ、また実際に初めてそこにかんろだいが据えられたのもこの歌が詠まれた明治7年の翌明治8年であったことから、明治7年の時点では、当時の人々が飯降作のかんろだいそのものを目にしながらも、親神の意味するところは理解し難かったことであろう。

そして、このような文脈で「おふでさき」は続けて、「この者を四年以前に迎えとって、神が抱きしめているということが

もう一つの証拠となる」(三号109)とお秀のことを挙げている。つまり、「かんろだい」をめぐる神の言葉の実現と共に、後に生まれて来る子供について予め述べておいて、神の言葉の実現の一つの証拠として示しているのである。

さらに、「おふでさき」は続けて、「真に思うことは早くこの者を生まれ返す段取りで、それを神が急いでいる第一のことである」(三号110)と詠っており、この子供の誕生と「かんろだい」は別々の事柄ではなく、「かんろだい」を据える段取りとして人々の心を澄ます必要があるように、この子供を人間のもとに返す上でもやはり神意に沿おうとする人間の心が求められていると解することができる。

このように、お秀という人物の生死や生まれ変わりは、神と人間の交渉のうちにあり、その命のありかたを通して具体的な人間模様の中に親神の精神が浸透していく様子が見えてくる。

ところで、第百九首前後の一連の歌をみてみると、神の視点というものが改めて感じられる。というのも、この一連の歌では神は人間が死ぬことを「迎えとる」(三号109)と述べ、人間が生まれることを「返す」(三号110)といい、そして人間が知りえない死後の様子を「抱きしめている」(三号109)と表現している。つまり、人間の「死ぬ／生まれる／不可知」の三対は、神を主語として「迎えとる／返す／抱きしめている」に変換されている。したがって、「おふでさき」を読むと、ときに何かの事柄(例えば人間の心を澄ますということ)が人間の生死より優先しているという印象を受け、その度に人の生死のあり方を考えさせられる。

そして、このような「迎えとる／返す／抱きしめている」に対応する「人間」の記述として、例えば「たましい」(十三号45)といった観念が必要とされるのであろう。このことが示すのは、我々人間が「かんろだい」や「つとめ」といった親神が提示する事柄を全体的に納得するには、親神の「迎えとる／返す／抱きしめている」という表現にも感覚的に通じていなければならず、それゆえに人間というものを「たましい」を含む存在として捉える必要があるということだ。つまり、自分自身の「たましい」について感得することによって、初めて「かんろだい」の意味も納得されるのである。

あるいは、「たましい」という名詞を使わずに、人間というものは「迎えとられる者」「返される者」「抱きしめられている者」などと親神の動作の受け手として記述してもいいかもしれない。いずれにしても、人間が親神の神意を解するには、親神との関係のうちに自己を捉え直す必要があり、一般的には認知できないとされる自己の「たましい」と、教会本部の中央に据えられている六角形の台が何らかの意味において関連していることが求められなければならない。

「おふでさき」は続けて、「これまで親神の働きは自由自在であると度々説いてきたが、その働きが人の目に見えたことはない」(三号111)、「これからはどんな話も説いておくが、その話通りに見えてきたことなら、それが親神の自由自在の働きである」(三号112)と詠い、神と人間のやり取りが続いていく様子を示している。